

石原英子教授の定年ご退職によせて

御 供 泰 治

石原英子先生がこの度平成13年3月31日をもちまして、定年ご退職される運びとなりました。先生には平成4年4月に薬学部より、本学部の前身である名古屋市立大学看護短期大学部へ教授としてご着任になられて以来、看護短期大学部の7年間と看護学部の2年間計9年間にわたり、看護学の教育と研究に尽力してこられました。

そもそも先生はそれ以前すでに、昭和29年4月に名古屋市立大学薬学部にご入学以来、平成4年3月まで実に38年の長きにわたり、田辺キャンパスにてご活躍になっておられました。そんな石原先生をご着任以前に、われわれが身近に感じたエピソードがございます。それは昭和63年4月に看護短期大学部が開設してからわずか4年後に、当時の化学と生化学を担当しておられた高橋禮子教授が、定年退職者第一号になりました。開設後まだ日も浅く、本学教員の退職記念事業に関するルールや慣習もなく、内部ではどうしたらいいものかと考えあぐねておりました時点で、高橋先生の当時の研究者仲間であられた、分子医学研究所の(故)加藤泰治教授と医学部細菌学の安田陽子助教授(本学非常勤講師兼任)と、薬学部の助教授をしておられた石原先生の三人が、いち早くご準備を進めておられることが判明しまして、われわれはお願いしてそれに便乗する形をとらせて頂いたお陰で、何とか面目を保つことができました。

先生はご母堂や叔母上が教師をしておられた関係で、女性の進学に関しては恵まれた環境におありでしたが、受験に際して特に薬学分野に興味を持ったり、薬剤師に憧れたというわけではなかったそうです。4年生になり就職先もすでに決まっていた学生生活最後の夏休みに入り、衛生化学教室の募集した環境衛生に関するアルバイトになんとなく応募したのがきっかけで、現在の研究者への道をスタートされたとお聞きしています。当初は、(故)石坂音治名誉教授のもとで11年間にわたり公害対策に関する最先端の勉強をされ、その後は手島節三教授(現名誉教授)のもとで糖質に関する解析の研究に従事されました。そして、昭和51年には「脂質分解酵素に関する研究」で薬学博士の称号を受けておられます。その他に「オリゴ糖の分析法」や「天然着色料の生理的条件下での

分解」、さらには「インフルエンザウイルスの細胞内増殖を規定する糖鎖の構造解析」などの研究をされ、衛生化学の分野でこれまで多くの業績を残してこられました。その間には、昭和36年愛知県薬剤師会奨励賞、昭和59年には三島海雲記念財団学術奨励賞などを受賞され、平成3年には中整研究奨励会助成金、平成4年には医科学応用研究財団助成金を受けておられます。また、名市大医学部第一生化学教室やウイルス学教室、名城大学薬学部臨床生化学教室や衛生化学教室などとの共同研究を通して、高橋礼子先生や信澤枝里先生など実に広い人脈をお持ちです。

先生の薬学部当時に、衛生化学教室や各種委員会の運営上先生が極めて貴重な存在であり、手島節三教授が敬服されているというお噂を、周りの方々から何度も耳にする事がありました。この事はその後縁あって先生に看護の世界へきて頂き、実際身近に接してみてもわれわれ自身が実感してまいりました。教授会や委員会でも物事や議論が停滞したり、はたまた暗礁に乗り上げたりした時など、先生の発案や一言によってその後うまく展開していくことが、これまで何度あったことか知りません。看護短期大学部時代には研究紀要委員会委員長や図書室運営委員会委員長を努められ、学部の運営に多大の貢献をされました。また看護学部設立準備の時期におきましては、入学試験専門部会の部会長としてご活躍されましたことは、特筆すべきものと思われまます。平成11年4月の看護学部発足と同時に、今度は大学評議員として名市大全体の運営にも参画され、さらに大学制度検討委員会では、より良い教養教育のあり方を求めてご活躍になってこられました。なかでも平成12年は本学の開学50周年の年に当たり、その記念事業検討委員会の主要メンバーの一人として、式典・講演会など成功裡に治められたことは、まだわれわれの記憶に新しいところであります。

教育面におきましては、大勢の学生を一人で担当する困難な条件にもかかわらず、以前の専門学校における教育とは異なった、大学における看護教育の中での化学の実験として、pHメーターの使用法の把握などを導入したり、助産学専攻科学生の卒業研究論文の作成指導に当たっては、教授の厳しさと母のやさしさで学生に接し、

石原英子教授の定年ご退職によせて

誰からも慕われてこられました。

一方、学外におきましては、日本薬学会・日本生化学会・日本糖質学会・社会薬学研究会・日本食品化学学会・日本食品衛生学会・日本母性衛生学会・愛知県母性衛生学会の各会員として、実に多くの学会発表や原著論文を出され、大いにご活躍をなさいました。特に日本薬学会においては衛生化学調査委員会のワーキンググループ委員会委員や食品成分試験法専門小委員会委員、衛生薬学委員会試験法担当会議食品成分試験法専門委員会専門委員などを歴任されました。先生の研究室には本学部関係者のみならず、自然に多くの薬学生も指導を求めて集まってきました。困難な研究の中にもその面白さと楽しさを肌で感じ取り、新たな人生の目標を見い出しては、次々と巣立って行きました。

また、学会以外の対外的な活動としましては、薬学部以来の衛生化学分野研究の専門家として、愛知県衛生試験所運営委員、愛知県と名古屋市の各環境審議会委員、愛知県の地域保健医療計画推進協議会委員と自然環境保全審議会委員、さらに国有財産東海地方審議会委員などを歴任され、社会的にも大いにお力を発揮されてこられました。

私にとりまして、先生は名古屋市立大学の先輩の一人に当たるわけですが、同じ医療の分野とはいえ「薬学」と「医学」という異なった領域であったこと、さらには田辺キャンパスと川澄キャンパスという距離も手伝って、失礼ながら10年くらい前までは先生をほとんど存じ上げませんでした。それが縁あって、お互いの研究生活をスタートした領域から離れて、この「看護学」という医療におけるまた別の領域で出会うことができました。今では毎月開かれる大学評議会において、隣り合って昼食を共にするほどの身近な存在であります。もう6年程前になりますが、看護婦国家試験のための勉強をするに際し、受験生にやる気を起こさせるような本を作ろうと思うという相談を、先生に持ち掛けました。そんな物には手を汚したくないというご返事を覚悟の上でしたが、思いもよらず快く賛成し、協力して頂くことができました。

た。現在この「デルカン」は、毎年全国で半数以上の受験生に支持されるまでになってきましたが、これは、私自身の弱い部分である「酸・塩基平衡」や「必須アミノ酸」「核酸(DNAとRNA)」「栄養素の吸収」などの項目に関して、先生の他の関連本には類を見ない分かりやすい説明が、多くの受験生に受け入れられたお陰と、感謝の気持で一杯です。

最後に、先生について語る時どうしても忘れてはならないことがあります。それは同じ研究者の道を歩んでこられたご主人と共に、長年にわたり暖かい家庭を築きながら、二人のお嬢さんを立派に育て上げてこられたことであります。大事な研究発表の前夜に子供が熱を出してほとんど困り果てたり、ある時には首をつらねばと覚悟したこともあったのよと今では笑ってさりと語っておられます。現在、長女ご一家はお近くに住んでおられ、お孫さんの学校のある日はおじいちゃん・おばあちゃんと朝食を一緒にすることになっているので、先生が朝早く起きて準備にとりかかるといふ、忙しい中にも嬉しいスケジュールになっているそうです。一方、次女は名古屋市内の大学へお勤めのアメリカ人とご結婚され、現在はハーフのお子さん共々先生のお宅でご一緒に暮らしておられるという、まさに国際感覚溢れる家族ということもできます。昨今看護の世界にも男性が次第に入り込んで参りましたが、何と言ってもまだまだ女性が主役の世界であります。臨床の場においても、大学においても仕事(研究)と家庭(家族)の両立を望み、何とかして片方を犠牲にしないようにとの悩みを抱きながら頑張っている人達にとっては、石原先生の存在そのものがお手本になり、将来の希望にもつながるのではないのでしょうか。近年わが国は平均寿命が80歳を越え、世界一の長寿国になりました。よく結婚は人生の第二のスタートといわれますが、今の時代なら定年退職はまさに第三のスタートに当たると言えましょう。どうかこれからはわれわれにとって、定年退職後の人生のお手本となって頂くようお願いを致しまして、お礼とお別れのご挨拶に代えさせていただきます。